

時計台内部探訪記

井上 智



関西学院でもっとも有名な建物をひとつあげるなら、「時計台」と答える人が多いのではないのでしょうか。「すてき!」「雰囲気が良い」。これらは、オープンキャンパスに来た学生や保護者の声です。中央芝生で、時計台を背に写真撮影する方も多く、時計台と関西学院は切っても切れない関係にあると言っても良いのかもしれませんが。

そんな時計台の「塔屋」部分に入りたいと思いました。キリスト教学の授業の「ネタ」になるかもしれない。そんな風に気楽に考え、日程を決め、時計台に行くと、集まった人数は10名弱。愛する時計台の内部に関心がある人は意外に多かったのです。

2階から外に出て、はしごを登ると塔屋部分の入口です。鍵を開けようとすると、一致する鍵がないことに気づきました。一旦、解散し、鍵を探しました。

いろいろ調べた結果、総務・施設管理課にあるかもしれないことがわかりました。早速連絡すると、「内部は危険だから入ることはできない」「外もはしごだから安全ベルトを着けないと」「職員はほとんど行ったことがなく、業者を呼ばないと入れない」等々。気楽に考えていた時計台内部ツアーがどんどん大事に。それでも、待つこと10分。総務・施設管理課の職員、業者の方々、総勢6名ほどが集まり、企画した私だけが内部に入ることを許されました。

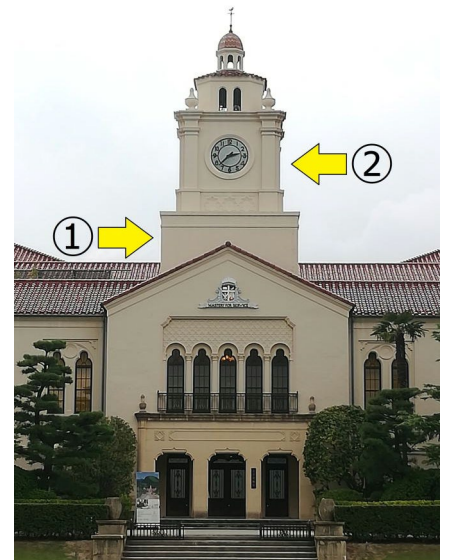
安全ベルトを着け、はしごを登り、時計台内部の入り口へ。茶色のドアを開けると、木の階段が。その左右には木で組まれた屋根があります。階段を上ると、倉庫【写真右①】。図書館時代には、実際に書庫として使われていたようで、その様子がわかります。いよいよ「時計部分」の裏側へ。細い金属製のはしごを使って登ります【写真左下】。登り終わると四方を時計に囲まれた部屋が現れます【写真右②】。「時計台」と聞くと、大きな歯車が動いている…そんなイメージがあるかもしれませんが、実際は小さな機械があるだけ。少しがっかりしたもの、普段は誰も来ることができない「裏側」です。コンクリートの壁には1959年の文字が。補修工事のものでしょう。いろいろな人の手によって維持されてきた様子がうかがえます。天井を見ると、小さな四角の扉があります。さらに上に行くには、はしご

を立てかけて上る必要があるとのこと。そこには、8:50と18:00にハンドベルの音が流れるスピーカーがあるそうです。その上は本当に危険とのことで、残念ながらこれ以上は登ることができませんでした。

1929年に建築された時計台ですが、もともとは図書館として用いられていました。時計を設置する場所があったものの、実際に時計が入ったのは建築後4年が経過してからです。1944年には連合国軍の攻撃目標とならないよう、外壁が黒く塗られ、建物外部と内部の金属が供出され、エンブレムは撤去されてしまいます。内部には、金属供出の爪痕が今も残されています(欄間部分)。

関西学院の様々な歴史を見てきた時計台。建築当初の目的は役目を終え、現在は時計台、大学博物館として関西学院のシンボリック的存在になっています。その内部を明かすと、がっかりされるかもしれませんが、この探訪記が時計台を見るときに多様な見方の一つになれば幸いです。

【宗教センター宗教主事】



『学院史編纂室便り』第50号(2019年10月25日)

関西学院大学 学院史編纂室 〒662-8501 西宮市上ヶ原1-1-155

TEL: 0798-54-6022 FAX: 0798-54-6462

<http://museum.kwansei.ac.jp/archives/>